

## 万葉集から

林 宏 匡

今日よりは かへりみなくて 大君の  
醜の御盾と 出で立つ我は

この歌は、小生が国民学校（現、小学校）の学童の頃に、軍国少年を育てるために万葉集の中から国語の先生が抄出した防人の歌である。

戦後、敗戦国として我が国に米国式学校制度を取り入れて、六・三・三制が布かれることになった時、昭和二十五年、小生は島根県立松江高校に入学したが、未だ多くの学校では六・三・三制の教育内容を如何に充実したものとするかを試行錯誤していた時期ではないかと思われる。

この様な不安定な教育環境にあつて、国語の先生から万葉集を読むことを薦め

られて読んでみたが、冒頭に掲げた様な勇ましい歌が余りにも少なく、家族を想う歌や恋歌が多いのに驚かされた。集中、未だに忘れ難い一首として、

夏の野の 繁みに咲ける 姫百合の 知  
りえぬ恋は 苦しきものそ

がある。この歌は大伴坂上郎女が藤原麻呂を思慕していたにも拘らず、藤原麻呂から無視された時に詠んだ歌です。千二百年前の歌とは思われぬ程に、現代人の心にも新鮮に響いて来るような恋の歌ではないでしょうか。

小生の高校入学時は、米国に倣ってホームルーム制が導入されたばかりで、学行事や進学指導等の必要な時だけは級友はクラスに集まり、担任の話を聞くというような名目だけのクラス分けて、授業は選択性で教科ごとに教室が変わるた

め、親友、況してや、ガールフレンドなど出来る環境ではなく、いつしか卒業という心太式高校生勝つであつたような気がする。

教室が変わる度に、心に秘めていた一首「夏の野の 繁みに咲ける 姫百合の 知らえぬ恋は 苦しきものそ」が付き纏つていたのである。

どうも小生も人並みに思春期を過ごしていたらしく、某女生徒が近くに座つて欲しいと願いつつ授業を受けていたのであるが、大方は的外れであつた。秘め歌の作者は女性であるが、この様な思ひは男女区別なく湧くものであろう。

「三つ子の魂百まで」というが、老境に入つて高校時代の思ひを逆手にとつて、密かに小生を思つてくれる架空の美女がいると想像しながら生きるのも、長生きを呼びこむ一法と愚考している。

言うまでもなく、不謹慎な考えで高校生活を送つたためか、卒業時の成績はびりから数えてX番めでした。

この青き惑星を振り廻り葱囲ふ

高久清美

『青花』(二〇一〇年六月 本阿弥書店)

福 富 清 子

(一)

「医家芸術」からの依頼「名句一句鑑賞」は、無窮の宇宙の無数の星から一つ選ぶに等しい難事。締切りまでの時間が私には短すぎ、パスしようと思った。その時脳裏をよぎったのが、私が医家芸術入会当時の事務局長鈴木喬氏の一言である。

「人間いくつになっても誘われることは何でもお受けする方が面白いですよ。思われぬ世界が広がるものですよ」

かくして難題に挑戦することとなった。選んだのが掲句である。実は、私が属する「秋」の結社誌『秋』一・二月号「高久清美『青花』の一句評」に、私は既に六百字書いている。『秋』の編集長でもある高久さんに事情をお話しし、再度「一句鑑賞」させて頂くことにした。

しかし医家芸術「注文の長さに変える

のは意外に難しい。窮余の策として、まず『秋』掲載の原文をそのままお見せし、その後、この句についての新たな発見感慨などを補足することにした。心からお許しを乞う次第である。

(二)

この青き惑星を振り廻り葱囲ふ 清美

生活スタイル等の変化で冬場に野菜を囲う人は少数派と思われる今、『青花』で掲句に逢って仰天した。この句集には、主婦の鑑とも言える高久さんの自画像が、自負・省慮・ユーモアで味つけして繰返し出て来る。しかし〈逢瀬めき少し目深に夏帽子〉(春シヨール間に色浮きオペラ観る)こそ高久さんのイメージ。鍬を振るう格好など想像外だ。しかしここに高久さんの句作の仕掛け、即ち、古今東西の文化を自家薬籠中のものにした、桁違いに壮大な想像力が働いているのだ。

〈月白や山顛すなはち天の底〉の如く、天地をひつ繰り返すのも御茶の子。葱を囲う主語は問題ではない。日々営々と働

き、慎ましい幸福を念ずる人々が、寒風の中、背戸や畑の片隅に泥まみれになって数株の葱を囲う。この現実が高久さんの手にかかる、汗・涙・溜息等の浸みたる一角の土地が、「青き惑星」に変貌するのだ。この措辞は半世紀前人類初の宇宙飛行士ガガーリンの発した「地球は青かった」を下敷きにしているが、無限大の宇宙を飛びかう地球以外の星々をも幻出する働きは、こちらが大きい。青い惑星を掘って囲われる葱は芳香を放ち、色鮮やかに瑞々しい風姿は凛としている。この一句は、換言すれば、「埴生の宿」に生きたる悦びに気づかせせる気宇壮大・色鮮やかな一こまの幻のようである。〈次の世は魔女になりたし落葉掃きと詠まれるが、人を楽しませなるべく魔法の想像力を発揮する有難い魔女の位に既に達している。

(三)

(二)で「青き惑星を掘る」高久さんを、私は「虚」と断定し、一句を想像の創造と決めてしまっている。ところが後、お

聞きした話。市川市のお宅では毎年冬、お庭の隅に冬野菜をしっかりと囲われるとのこと。鉢・シヤベル農具一式揃っているそうだ。私の一方的な思い込みを正す高久さんの口振りには、いわゆる「自句自解」の押しつけは無く、「詩」とは「虚」を「実」のようではなく、「実」を「虚」のように創ること、という「秋」の創立者石原八束師の主張に添えたことに満足している気配があった。

それにしても、「庭の一遇を掘る」を「青き惑星を掘る」と言い、

ふらふらこや一顆の星にふるるまで

（第一句集『一顆の星』）

雛飾る地球ときどき揺れにけり

（『青花』）

水眼鏡冥府入口探しをり

（一〇）

など、極く身近な句材でも宇宙的・地球的規模の句が出来上がる。その秘密は何だろう。

「秋」の佐怒賀主宰によれば、高久さんは「教養とエスプリの作家」である。一

九七〇年に学習院大学政経学部を卒業され、家庭に入っては主婦として、学究の片腕として、

観音のおん手借りたし年詰まる

（『青花』）

雨蛙主婦に保護色ありにけり（一〇）

ホメロスの遺跡の猫と春惜しむ（一〇）

ガリレイを裁きし回廊春の雪（一〇）

銃持てるアラブ兵士と海市見る（一〇）

国境てふ創ある大地鳥帰る（一〇）

等々、地球を大胆に巡りつつ、知性、感性全開の歳月を重ねられた結果であろう。

（『青花』のあとがきに「おろそかに生きてきたつもりはないけれど」と記される）。

雪国の金沢で半世紀以上暮らし、旅と言えは東京・金沢の往復ぐらゐの私が自分の非才を棚上げて高久さんを羨むのはみつともない事だが、また、W・ブレイクの「一粒の砂に宇宙を観る」、荘子の「井の中の蛙大海を知らず」に続く「されど、大空の深さを知る」で無理に自分を宥め、自己満足しては新発見は望めない。

話が横道にそれるが、高久さんの「この青き惑星」の土台となったガガーリンの「地球は青かった」よりも更に三十二年前、詩人北原白秋は詠んでいる。

月から見た地球は、円かな、

紫の光であった、

深いほひの。

……………

わたしは夢見てゐたのか、

紫のその光を、

わが東に

……………

（詩集『海豹と雲』 1929年）

これを初めて読んだ時の感激。詩人の想像力に溜息をついた。ところが、白秋の年譜に目を通して少し合点したところがある。一九二八年七月、彼は大阪朝日新聞の依頼で、恩地孝四郎と旅客機ドルニエ・メルクールで福岡から大阪まで飛んでいるのだ！

詩という「虚」の世界に花が咲くのは、土壌深くに「実」の根があればこそであ

る。高久さんと同じはずの「青き惑星」に住む私、少し真似して、猫の額ほどの庭の隅をほじくり、朝顔の種など蒔いてみようか――。

この時、古人の名句が脳裏をよぎった。

朝がほや一輪深き淵の色 蕪村

時あたかも花の季節、最後にあの芭蕉の一句を、日本全国の、東北の、三春町の人々に捧げたいと思う。

さまざまのこと思ひ出す桜かな 芭蕉

## 大戦最中 青春の句

### 有 泉 七 種

その季節になれば、きまつたように、脳裡に浮かんでくる俳句の一つに、  
惜春のランプかかげし一夜かな

というのがある。作者は靱木秀穂先生。いまは、「医芸俳壇」の常連のひとりであるが、彼の青春時代の作品のひとつであり、私は、いまでも、彼の代表作のひとつとして、「こころのなかに」とどめている。

昭和十七年ごろ。秀穂君も私も、東京は愛宕のキャンパスで、医学を学んでいた。戦時中ではあったが、緒戦の勝ち戦のころであったから、医学のかたわら、俳句にも興味を抱いて、当時の俳句結社に所属して、作句にはげんでいた。秀穂君は加藤楸邨の「寒雷」であったかと思う。私は飯田蛇笏の「雲母」であった。そのほか、「若葉」の福島君、鷺谷君、土屋君、「寒雷」の谷沢君なども俳句を楽しんでいた。なかでも靱木君と福島君とは、リーダー的存在で、「春蟬会」と名づけた句会を立ち上げて、ともどもに、月ごとの句会を楽しんでいた。

昭和十八年の夏のころの句会ではなかつたかと思う。当時の私の目に、強い印象となつて残つたのが、「惜春のランプかかげし一夜かな 秀穂」の一句であった。まさに、青春そのものの俳句だ。しかも、大戦最中のころのこと。私は深い感銘にうたれた。こんな時代の、この青春性は、忘れ去ることは出来ない。

やがて、戦況は負け戦の様相となり、終に敗戦。戦後の医学教育改革の混乱のうち、私たちの「春蟬会」の姿も消えて、私たちの俳句仲間も、それぞれの医学の道に進んでいった。それから、幾星霜。私が、俳人靱木秀穂と再会したのは、ほかならぬ、この「医芸俳壇」の誌上であった。なつかしかった。うれしかった。そして、楽しかった。

さきごろ、靱木秀穂君から、ハガキが届いた。それには、「(前略) 東京に初雪が舞う日に退院して来ました。帰宅し、貴兄からの賀状嬉しく拝見した次第です。当方からは入院中のため欠礼し失礼しました。貴兄はお元気の御様子何よりです。医家芸術で毎回貴兄の句を拝見するのを楽しみにしています(後略)」。としるされていた。秀穂君も私も、卒寿を目の前にした高齢である。しかし、俳句には年齢がない。これからも、ともどもに、俳句を楽しんでゆきたい。そんな想いの昨今である。